

ロクでなし魔術講師と武装親衛隊

双剣使い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アルザーノ魔術学院二年次生二組の生徒、アランIIアストレア。成績は優秀だが、普段はあまりしゃべらず、周りと絡むことも無い。

その正体は、一年余り前に姿を消した帝国宮廷魔導師団特務分室所属、執行官ナンバー13《死神》のヴィルヘルム・エーレンブルグ。これは、彼が守ると決めたものを守るために戦う物語。

※この作品は、Dies iraeの黒田卓が仲間だつたり敵になつたりして出てきます。全員、能力と外見は同じですが、記憶は口クアカの世界のもので、Dies iraeの世界のものはありません。性格も少し変わってくるので、無理な人は読まない方がいいかと思えます

目次

プロローグ	1
ダメ講師、ババーンと降臨	8

プロローグ

「はあっ……はあっ……。クツソ、アイツら、まだ追ってきてやがる！」

「うるせえぞ、グレン。黙って走り続けろ」

「もうっ、ヴィル君もそんなに怒っちゃダメ。グレン君も無駄口叩かないの。余計に体力消耗するよ！」

「ちっ……わあつたよ！」

「わ、悪い、白犬」

裏路地を三人の男女が走っていた。彼らは皆この国の軍の礼服に身を包んでいた。この国を象徴する魔法を使って戦う部隊、帝国宮廷魔道師団の制服だ。

現在の時刻はすでに深夜を回っている。周囲には夜のとぼりが下りており、真っ暗だ。狭い裏路地なら、すぐに転んでしまいそうなものだが、彼らはそんなミスをしないで走り続ける。訓練を受けた彼らには造作もないことだ。ならばそんな彼らを追いかけるのは何かと
いうと——

「シャアアアアアアアアアアア——ッ!？」

人だ。彼らが守る国の民だ。だが、今の彼らの表情は虚ろで、幽鬼のようだ。躊躇というものがないのか、手には鍬や包丁、鉋などの刃物を持っている。

彼らは、とある麻薬の中毒患者だ。その薬は錬金術の応用で作れるのだが、それを作れるのは現在はまだ一人。彼らと同じ、帝国宮廷魔道士団のメンバーだ。その同僚が薬を使って国の重鎮を大量に暗殺したのだ。しまいには、女王陛下まで手にかけてしようとしたのだ。ギリギリのところを食い止めた帝国宮廷魔道士団は、彼を国家大罪人として暗殺司令を出す。

そこで指名されたのが、この三人——ヴィルヘルムⅡエーレン

ブルグ、グレンIIレーダス、セラIIシルヴァースだ。三人は共に任務に掛かることが多かった。故に、首謀者は簡単に処分されると思われるのだが、そうはならなかった。

彼は、麻薬を投与して傀儡と化した民を戦わせてきたのだ。一体一体はそれほど強くなかったとしても、数が数だ。上司に援軍を頼んだのだが、援軍が来ることは無かった。そのため、圧倒的に人数の足りない三人は撤退を始めたのだ。

「退け、邪魔だ」

ヴィル君と呼ばれた長身の青年——ヴィルヘルムが、正面から襲いかかってきた中毒患者を殴り飛ばす。

その薬を投与されると、中毒を引き起こし、定期的に薬を投与しなければ死に至る。かと言って、投与を繰り返しても肉体が崩壊して死ぬ。結局、患者は助からないのだ。

先がないからと言って、無害な人を殺す訳には行かない。やむを得ない場合を除き、最低限の人数を殺すにとどめているので、手加減している。

しかし、軍人である彼らが手加減をしたところで一般人には意味もないのだが、壁に叩きつけられた患者は手足が曲がっていても立ち上がる。

「チツ、相変わらずクソめんどくせえな！」

「全くだ——ゼツ！」

ヴィルヘルムとグレンが拳や魔術を使って突破し、後ろから援護するのがセラの役割だ。

ここまで順調に撤退をしていたが、ついにここで窮地に陥る。

前方の十字路に大量の末期患者が集まっているのだ。しかも、後方からは、前方の倍はあろうかという人数が押し寄せてくる。足音から察するに左右からも近づいてきているようだ。

誰かがここで時間を稼がなければならぬ。ヴィルヘルム達は、熟練の勘から分かっているが、誰も言い出すことが出来ずにここまで来てしまった。いよいよ覚悟を決める時か。そうグレンが考えた時だ。

「テメエらはこの角を左に曲がれ。そっち側は敵が少ないだろうから、残り少ない魔力でもどうにかなるだろう」

「えっ!？」

ヴィルヘルムの言葉に驚愕を露わにするグレンとセラ。彼の発言は、自ら囮になることを宣言していたからだ。

「ダメだ、ヴィル！死んでしまっただろ！」

「そうだよ！ヴィル君が囮になる必要なんて何処にもないじゃん！」

「確かに俺たち三人が全員生きて生還するのが最適解だ。けどなア、テメエら二人とも魔力残ってねエだろ」

「それはまあ……そうだけだよ……」

その言葉を否定できなかったグレンは苦い顔になる。しかし、セラはそうはいかなかった。

「確かに、私ももう魔力はほとんど残ってないよ。でも、ヴィル君にはそんな危険なこととして欲しくない！最善なのがそれだつてわかってても、私はそんな方法を選びたくない！」

「ッ！」

「セラ……お前……」

セラの言葉にヴィルヘルムとグレンは驚愕を露わにする。命の危機にあっても、誰もが笑える結末を選ぶ。そんなセラの考えが彼らには眩しかった。

だからこそ、ヴィルヘルムはその輝きを失わせないために最善の方

法を取る。

「……そうか。なら、テメエは生きてその信念を繋げていけ」

「え……？」

「あとは任せるぞ、グレン」

「ああ…任された」

グレンはヴィルヘルムの言葉に何かを決意した顔で頷くと、セラの元へ歩き始める。

それに対して、ヴィルヘルムは二人に背を向ける。

セラから見たらそれはまるで自分たちとの別れを意味しているように。そんな彼を止めようとして一歩踏み出そうとして——

「待つ——!?うっ!」

「……悪い……セラ」

一瞬で背後に回ったグレンが、セラの首筋に手刀を落とし、強制的に意識を刈り取る。

グレンの顔は、セラを気絶させることに苦痛を感じているようで、歪んでいた。

気を失ったセラを抱え、背中に背負うとグレンはヴィルヘルムに背を向ける。

「絶対に…生きて帰って来いよ」

「ハッ!最初っからそのつもりだ!」

ヴィルヘルムの返事を聞くと、セラを背負ったグレンは走り始めた。

「さて……」

セラを背負ったグレンが路地の先に消え、姿が見えなくなったタイミングで、追手の中毒患者が姿を見せる。

「キシヤアアアア——!?!」

ウイルスヘルムの姿を視界に捉えた彼らは、奇声を発しながら路地裏を駆ける。およそ人には不可能な動きで狭い路地裏の壁を蹴る。

右に左にとこちらの視界を狂わしたところで、無防備なうなじに向かって手にした鉞を振り上げ——ズシヤツと音を立てて地面に落ちた。

首から上を失っており、首の断面からは鮮血が吹き出し、辺りを真っ赤に染め上げる。

その場には、右手の手刀を真後ろに振りぬいたウイルスヘルムがいる。その右手は鮮血に彩られ、顔には狂気的な笑みが浮かんでいる。しかし、中毒患者たちはその光景に怯えることなく、次々とウイルスヘルムに襲い掛かっていく。既に人としての理性を失っている彼らは、この程度ではひるまないのだ。グレンたちが撤退せざるを得なかった理由もこれだ。

「キシヤアアアア——!?!」

「うるせえよ、黙って死ね」

迫りくる中毒患者たちを次々と殺していく。首を跳ね、心臓を貫き、頭を掴んで地面に叩きつけていく。しかし、どれだけ殺しても無限と思える数の中毒患者が徐々にウイルスヘルムの周りを囲んでいく。しかし、それを見たウイルスヘルムはさらに笑みを深める。

「ハッ、ウジャウジャ出てきやがるなア! いいぜエ、掛かって来いよオ!!」

ウイルスヘルムの全身から鮮血のように真っ赤な杭が生え、ウイルスへ

ルムと中毒患者の集団が同時に地を蹴った。

~~~~~

数日後。

あれからウイルスヘルムは一度として職場に姿を現さなかった。

セラとグレンの心配はつるばかりだった。彼らが事件の顛末を知ったのは数日後。事件の後処理にあたった彼らの同僚から聞いたのだ。

現場となった路地裏には、中毒患者のものと思われるおぞましい量の血と肉片が壁や地面全体に飛び散り、その中に、ウイルスヘルムのものでしょうかと思われる左腕と、無造作に千切られた血のしみ込んだ帝国宮廷魔導師団の制服が落ちていた。

故に、結論として、ウイルスヘルムは殉職。制服の血痕がウイルスヘルムの血液型と一致したことから、グレンたちを逃がした後に中毒患者らに食い殺されたと思われる。

それを聞いた瞬間、セラの目から涙があふれる。当然だ、ウイルスヘルムが気づいていたかどうかは定かでないが、自身の想い人が死んだら、その喪失感はかなりなものだ。そのまま、立っていることもできず、地面に膝をつき、顔を覆って涙を流す。つい先日の誕生日に彼から貰ったペンダントを胸に掻き抱いて。

任務で何度もペアを組んできたグレンも驚きを隠せず、呆然と突っ立っているだけだった。

~~~~~

見晴らしのいい丘の上に、一人の少女が立っていた。

腰まで伸びる鮮やかな銀髪と、所々に赤い紋様が走る綺麗な肌が美

しさを引き立てている。年齢は十代半ばかそれより少し上。しかし、彼女が見せる悲しげな表情が、まるで薄幸の未亡人のように見せている。

彼女——セラが見つめているのは墓標。眠るのは、一年ほど前、彼女を追手から逃がして死んだ想い人。しかし、彼女はまだ彼が生きていることを信じている。

彼が死んだと聞かされた時は一週間ほど泣いたが、彼の遺体が確認されていないことと、最近、彼が目の敵にしていた敵組織の構成員が死体となって見つかっているのだ。

もしかしたら彼が生きて戦っているのかと冷静になってから考え、後を追っているが未だに見つからない。

「久しぶり、ヴィル君。ちよつと長期任務に出てたから来れなかったけど、何とか終わったよ。……あの日からもうすぐで一年だね。私はまだ続けてるけど、あの後すぐにグレン君も居なくなっちゃったんだ。ヴィル君のことで責任感じてみたいだし。仕方ないかもね。それとね——」

一通り言いたいことを言ったのか、膝をついて話していたセラが立ち上がる。

「……それじゃ、もう行くね。これからまた新しい任務なんだ。終わったらまた来るね」

そう言い、踵を返す。一瞬間を歪めるも、すぐに笑顔になって「またね」と言つて丘を降りていく。

決然と、美しい銀髪をそよ風に揺らしながら。

そして、彼女を見送るように、墓標に置かれた花束が風に吹かれて揺れていた。

ダメ講師、ババーンと降臨

「——てくだ——、ヴィル——」

「んああアア?」

ヴィルヘルム・エーレンブルグは自分を呼ぶ声で意識を呼び覚まされる。自分の体が何かに圧迫されていることもそれに拍車をかけている。

「起きてください、ヴィルヘルム」

さらに自身を呼ぶ声でヴィルヘルムは少しづつ目を開く。

視界の先には、一人の白い少女が、ヴィルヘルムの腹の上に跨っており、ヴィルヘルムの顔を覗き込んでいた。

「おはようございます、ヴィルヘルム」

「ああ」

微笑んで挨拶をしてくる彼女に、そつけない返事を返すヴィルヘルム。

しかし、少女はそんなヴィルヘルムの態度が気に入らないのか、「私、不機嫌です」と言いたげに頬を膨らませている。

「もう、どうしてそんなにそつけない挨拶をするんですか!朝の挨拶は大切なんですよ!」

「別にいいだろオが。そんなとこまでテメエにとやかく言われる必要はねエだろオがッ!」

「はあ……どうしてヴィルヘルムはこんな子に育ってしまったのでしょうか……」

「おいこらテメエ!勝手に俺の母親面してんじやねエよッ!!」

「どうしたらいいのでしょうか……はっ、これなら……」

「話聞けやゴリアツ——ッ!?!」

喚くヴィルヘルムの両頬に手を添えて逃げられないようにすると、少女はヴィルヘルムの唇に自分の唇を重ねた。

「んっ……ちゅっ、くちゅっ……」

それも口内に舌を侵入させる深い方だった。

「んううッ!んんっ!」

突然のことに驚いたヴィルヘルムは、抵抗すら忘れており、なすがままになっている。

舌を入れた深いキスは、互いに息が続かなくなったことで中断される。

ちゅぱつと音を立てて二人の唇が離れる。離れた唇の間には銀色の橋が架かり、艶めかしさが漂う。

お互いにキスによる余韻で少しの間、ボーッとする。

先に戻ってきたのは、ヴィルヘルムの方だった。

「なっ、テメエ、今何しやがったア!!?」

「ふふっ、やっぱり言うことを聞かないヴィルヘルムにはこういうのが一番ですね」

ヴィルヘルムは怒りを露わにして目の前の少女を睨むが、彼女は微笑みだけで、どこも応えた様子はなかった。

「チツ……」

そんな少女には何を言っても意味がないと思ったのか、ヴィルヘル

ムは彼女のわきの下に手を入れると、ひよいと持ち上げ、自分の隣に転がす。

何が起きたのか分からずにポカーンとしている少女をベッドの上に放置して、ベッドから出たヴィルヘルムは朝食を作るために部屋を出ていく。

「ちよつとヴィルヘルム！ひどいですよお！」

我に返った少女は文句を言いながらヴィルヘルムの後を追いかける。

少女の名前はクラウディア・イエルザレム。

現在、ヴィルヘルムが生活している家に同居している少女である。

~~~~~

「……遅いッ!!」

ここはアルザーノ帝国魔術学院。その東館校舎二階の最奥、魔術学士二年次生二組の教室。木製の長机が半円状に黒板と教壇を囲っている場所の最前列に座る彼女——システイナーナ||ファイーベル——は苛立ちを隠そうともせずに叫んだ。

「どういふことなのよ！もうとつくに授業の開始時間を過ぎてるじゃない!?!」

「確かにちよつと変だよね……」

システイナーナの隣隣の席に腰かける少女、ルミア||ティンジェルも首をかしげる。そして、隣の席に座る男子生徒に声を掛ける。

「ねえ、アラン君も不思議に思わない？」

「まあ確かに不思議だなア。授業受けなくても点取れる俺からしたら関係ねエんだけどなア」

アランと呼ばれた生徒は、あろうことか、机に両足を組んだ状態で載せ、偉そうにふんぞり返っていた。さすがのルミアも、この姿には苦笑いを隠せなかった。

一から七までである魔術師の位階、その最高位である第七階梯に至った大陸屈指の魔術師であるセリカIIアルフォネアから、行方不明になった前担任の後任の講師が今日やってくることを告げられてから早くも一時間が過ぎた。最高峰の魔術師が、その講師のことを優秀だと言って退室していったのが既に一時間以上前の話だ。彼女は、新しい講師について、「優秀な奴だよ」と言っていたが、こうなるとなかなか信じられなくなってしまう。

「まったく、この学院の講師として就任初日からこんな大遅刻なんていい度胸だわ。これは生徒を代表して一言言っただけなわけないといけないわね……」

そう言って意気込むステイナーに、アランIIアストレアは、「何でお前が生徒代表を自負するんだ、テメエが意気込む必要はねエんだよなア」と思ったが、言ったらめんどくさいことになるだろうし、巻き込まれるのも嫌なので、寝ることを決めたその時だった。

「あー、悪い悪い、遅れたわー」

がちや、と教室前方の扉を開けて、噂の非常勤講師と思われる男が入ってきた。

彼の声が教室に響いた途端、寝るつもりだったアランの意識は強制的に叩き起こされた。なぜなら、新任講師の声と顔を、彼はよく知っ

ているからだ。

そして、彼に見覚えがあるのは、アランだけではなかった。

隣で驚きのあまり呆然としているルミアとシステイーナの二人だ。特に、システイーナは嫌な記憶でもあるのか、指を指したまま、「あ、ああ、あああ——」とどもりまくっている。

「……………違います。人違いです」

システイーナに指をさされている青年——グレン＝レーダスは、抜け抜けとそんなことを言い放って、無視する態勢に入った。

「人違いなわけじゃないでしょ!? 貴方みたいな男がそういてたまるものですかつ!」

「ここら、お嬢さん。人に指をさしちやいけないってご両親に習わなかったのかい?」

システイーナとグレンの言い合いを聞いている教室内の生徒たちは、ざわめき始める。

しかし、グレンは生徒たちの反応などなんのその。無視して教卓に立ち、黒板にチョークで名前を書く。

「えー、グレン＝レーダスです。本日から約一か月間、生徒諸君の勉強の手伝いをさせていただくつもりです。一生懸命頑張ります……………」

グレンがノロノロと自己紹介をしていると、苛立ちを隠そうともせずシステイーナが冷ややかに言い放つ。隣の席のルミアは、そんなシステイーナを宥めようとしているが、かけるべき言葉が分からず、オロオロとしていた。

アランはと言うと、グレンの唐突の登場に驚いてはいたが、表情には出さず、事の成り行きを見ているだけである。

システイーナの言い分を聞いたグレンは、先ほどまでの取り繕った

口調を止め、素を出し始めた。

「よし、さっそく始めるぞ……一限目は魔術基礎理論Ⅱだったな……あふ」

あくびを噛み殺しながらグレンがチョークを手に取り、黒板の前に立つ。

途端に、教室内の生徒が気を引き締める。第一印象こそ最悪だったが、大陸屈指の第七階梯の魔術師であるセリカⅡアルフォニアに『優秀』と言わせるほどののだ。期待しないわけがない。

そんな中で、唯一アランだけは、グレンの行動に期待などしていなかった。

それなりの間、共に任務をこなしてきたのだ。彼の考えも知っているし、これから取るであろう行動も予測はできる。否定もしない。だから、アランは両手を頭の後ろで組み、頭を預けて眠りについた。

故に、この後、教室で起きたあまりにもひどい講義を知ることにはなかった。

~~~~~

「オイこら起きろ、居眠り学生」

頭の上から声を掛けられたアランは、頭を上げる。しかし、その表情は、寝起きの顔ではなかった。

「んだよ、グレン」

アランの機嫌は相当悪い。安眠の邪魔をされたのだからそうだろう。だが、それが今回は裏目に出ていた。

「おいおい、仮にも講師である俺に向かって呼び捨ては無いだろう。ちゃんと先生を付けろ、この不良学生」

今のアランはグレンの同僚であったヴィルヘルムではないのだ。咎められて当然である。

自分に非があることを悟ったアランは、素直に謝罪する。

「すみませんでした、以後気を付ける…ます」

ただ、昔の感覚はすぐにぬぐえず、付け足す感じになってしまったが。

それでも、グレンは満足したようで、気を付けろよ、とだけ言つて教室を後にする。

次の授業は、錬金術実験である。

アラン達生徒が着ている学院の制服には、身体回りの気温・湿度の調節を行う魔術——黒魔【エア・コンデイショニング】が永続付与されており、一年中を通して着ることができる。

しかし、錬金術の実験では、生徒自身の手で魔法素材を加工し、器具を使って触媒や試薬を取り扱う授業だ。内容次第では、制服が汚れたり、薬品の臭いが移ることもあるため、生徒たちは更衣室で実験用のフード付きローブに着替えなければならない。

だが、アラン——正確にはヴィルヘルムだが——は、黒魔【セルフ・イリユージョン】という魔術を使って姿を変えている。

なぜなら、帝国宮廷魔導士団に所属していたヴィルヘルム・エーレンブルグは、一年ほど前に起きたとある事件で、殉職したことになっているからだ。実際は、彼が生きているのを知っている人間は、まったくいない。当時の上司や同僚、後輩も、誰もそのことを知らない。ヴィルヘルムが、ある理由でこの学院に入学するためには、本来の姿ではバレてしまうからだ。

グレンはかつての同僚だが、どこから情報が洩れるか分からない以上、簡単に正体を明かすわけにはいかないのだ。

そんなわけで、ヴィルヘルムは着替える際、更衣室に行くのではなく、教室に残るのだ。「セルフ・イリユージョン」は、光を操作して外見を見せかけているだけなので、自分のイメージ一つで、姿を変えられる。実験用のローブを想起すれば、すぐに着替えられる。

アランの容姿は、ヴィルヘルムほどではないにせよ、それなりに荒々しいため、クラスの男子生徒から声を掛けられることも無いので、安心して教室にいられる。

つまり、ヴィルヘルムは学院内にいる間、常に魔術を使っているということだ。

常に魔術を使うのは、ものすごい速さで魔力を消費する。魔力は、常に消費し続けると、マナ欠乏症に陥る。マナ欠乏症とは、体内の魔力を極端に消費した際に起こるショック症状のことを指す。マナとは、生命力のことを指し、魔術を使って急激に消耗すれば、命に関わるのは当然だ。魔術とは、自身の命を使う諸刃の剣なのだ。

しかし、ヴィルヘルムは学院にいる間、常に「セルフ・イリユージョン」を使っているが、マナ欠乏症になったことはない。それは、彼の体質に関することなのだが、今は割愛する。

黒魔「セルフ・イリユージョン」に魔力を少し追加し、学院の制服を実験用のローブへと変える。

「……この——ヘンタイ——っ！……」

準備の整ったヴィルヘルムが、実験室に向かうために教室の扉を開けた途端、廊下の先から女子生徒たちの悲鳴が聞こえてきた。中には、聞き覚えのある声が混じっていたため、おそらく同じクラスだろう。大方、男子更衣室と女子更衣室を間違え、タコ殴りにされたのだろう。

殴られたのは誰かと考えると、よく知る同僚の顔しか浮かんでこなかったヴィルヘルムは、考えることを止めた。何年前かに、男子更衣室と女子更衣室の場所が入れ替わったはずだ。そのことを知らなかったグレンが着替えている最中の乙女の園に侵入↓発見↓タコ殴

りと言ったところだろう。

どれだけ制裁を加えられたかは分からないが、女性の着替えを覗いたとき、後が怖いことは必然だ。そのことを、身をもって知っているヴイルヘルムは、心の中でグレンに合掌すると共に、今日の錬金術実験の講義は中止になると考え、早めに食堂へと足を向けた。

事実、次の錬金術実験の講義は、担当講師が人事不祥になったため、中止だった。